

おおやまと

大倭出版局・大倭紫陽花邑

令和3(2021)年
4月号
通巻608号
毎月23日発行
(題字 矢追日聖)

★発行日 令和3年4月23日
★発行所 大倭出版局
〒631-0042 奈良市大倭町1の12
☎(0742)45-1192
★印刷 大倭印刷製本
★定価 1部 300円
年間購読料3,500円(送料共)
★郵便振替 01050-6-67002
大倭出版局
URL <http://www.ohyamato.jp>



石垣島、前嵩(まえだけ) 福井市 齋藤正宏さん撮影(文・8頁)

再録 昭和41(1966)年6月23日発行『大倭新聞』第22号より

対談 日本とはなにか 〈下〉 後編 …最終回…

鶴見俊輔氏(43歳)×法主 矢追日聖(54歳)

むすびの家の明日

鶴見 皆で今作っている「むすびの家」も、これからの使いみちという問題がありますね。それこそ、初期のカストロ(キューバ革命指導者・前号参照)が考えていたような場にしてもいい。理想の社会をどう作っていくか、北朝鮮人も韓国人も中国人も、右翼でも左翼でも神道でも、誰もが寄り集まって話し合う。山岸会式に、7日間外へ出ないでゼミナールやっても面白い。そういうことをやる可能性がある場所かと思えます。

その時、いろんな異分子を取り込むと触媒になって、面白みが出る。だから※1谷川雁を呼んでもいいし、※2小田実だつて、北朝鮮から侵入して来た誰だかわからない人物だつてかまわないですよ。

※3原水協にはできない、共産党の会合にも、※4全学連の中央大会にもできない、とんでもない話し合いがこころならできると。世界にそういう場所つてないでしょう。(※1…詩人、評論家、活動家。吉本隆明らとともに既成左派を批判、大正炭鉱の労働争議を自ら指導するなど、特に60年代の活動が新左翼系の学生運動家から熱烈に支持された。※2…作家。平和団体「ベトナムに平和を―市民連合」を率いた市民運動家としても知られる。※3…原水爆禁止日本協議会。反核を訴える世界大会を毎年主催、官民一体の平和運動を目指して結成されたが、保守陣営の脱退や革新陣営内部の対立が起り、後に分裂へと至った。※4…全日本学生自治会

総連合の略称。戦後、学生運動の担い手を多数生んだ学生組織。前号参照

編集部 (柴地則之) 「むすびの家」の話が出たところで、紫陽花邑が「むすびの家」とこれからどう関わっていったらいいかご意見を頂いて、この対談を締めくりたいと思います。

3年前に「むすびの家」の建設を思い付いた時は、もっと単純なイメージしかありませんでした。無料宿泊所的なもの、簡易宿泊所の延長のような施設があったらいいだろう、という程度です。「むすび」と「交流」を一つに合わせて、「交流の家」と表現したのは、大江満雄さん。それをF IWCが使わせてもらいました。(※5:表現主義の詩作、プロレタリア詩運動、戦争詩への転向を経て戦後はハンセン病療養所で暮らす全国の患者らと深い交流を続けたクリスチャンの詩人。鶴見氏とハンセン病患者を結びつけを作った。2月号参照)

法主 面白い場所になると思います。先生が今言っておられたように、世界中の人が寄り集まってくるような場所が今の時代には必要です。

編集部 この前、法主さんが言っておられましたね。今は宗教家が動いていない。宗教が正面から当たって行っても非常に不利な状況だと。だからもう少し別のやり方、例えば大倭教が中心になって、社会的な実力を付けながらやっていく道はないだろうか。そういう話だったと思いますが。

法主 そうですね。いろんな人、いろんな宗教の信者たちが集まってくる場所もそうです。各々の個人差はあったとしても、集まれば、お互いどこかに接点を見い出せると思います。

例えば私なら、キリスト教の人が来たって話があるだろうし、仏教の人と会ってもわかり合えるだろうし。世の中の人が皆仲良くしよう、平和にやっつけようという目的には、反対する人もそう

いないでしょう。そんなふうには、一つの接点を見つけられるはずですよ。

各国、各民族の変わり者がここへ集まって、各々が自分の個性、能力を出し合う。成果を自分の国へ持ち帰るなり、ここから運動を起こすなりしてもいいです。横の結び付きを親密にして、思想とか宗教にこだわらず、裸の人間と人間の肌の触れ合いを大切にしていこう。思想が同じだから、あるいは同じ目的を持っているから一緒に運動しようとするのは、なんだか薄っぺらい感じがします。やはり人間と人間の親密な関係が大切だと思います。

戦前、東京にいて「なるほど、話としてはいいから一緒にやりましょう」と同調してくれた人はいませんでしたけど、いよいよ何かする段になると、もうひとつ息がピッタリ合わない。溝があつて。というのは、自己擁護する人が多いんです。

社会的地位のある人、財産のある人、名譽のある人、そういう人であればあるほど、まず自分の身を守ろうとする。言い訳せず、裸でぶつかっていかうとする人は案外少なかったですね。そうすると、どこにも所属してない浪人がじつは一番仕事できるのか?とも思いました。

あの頃、右翼の一体が、事件を起こしたでしょう。そりゃ、行為そのものはいいいものじゃないですよ。だけど、命懸けの誓いを立てて一時は墓場へでも一緒に行こうか、という心境で行動を共にした人たちが、事件も終わって戦後、まるでバラバラですもの。(※6:後に「血盟団」と呼ばれる青年組織が1932年に起こした政財界の要人暗殺事件。自らの神秘体験と日蓮主義に触発された宗教家・井上日召が主導。国家改造による貧民救済を構想したが、最終的に体制の破壊を企て、集団クーデターによらない「一人一殺」を掲げて決起した。関係者の海軍

青年将校らも後に五・一五事件を起こしている)

それに比べたら、赤穂浪人の四十七士が討ち入り後、一緒に切腹できたのはよかったなあとと思います。武士の情ですね(笑)。

鶴見 それは面白い見方です(笑)。

次の世界を作る

法主 ああいう事件の顛末を見せられると、日本の国家主義者とか、国粹主義者や右翼というものの本当の腹の中がわかります。事件を起こした生き残りの中に、お互いの生活まで面倒見合おうって人はいないんじゃないですか。極端な見方もありませんが。

鶴見 いないようですね。

法主 寂しいですね。私はそんなの嫌なんです。個人的な生活でもお互い助け合っていく、くらいじゃないと気が済まない。そうでないと、同じ運動をするにせよ、行動を共にしようという気にはなれないですよ。難儀なことに。

鶴見 そりゃそうです。

法主 紫陽花邑の集団生活をしていると、財布は一緒だし、相互扶助の社会でしょう。こういう形なら自分の気持ちは収まりますけど。

つまり、「むすびの家」が完成した後は、大倭の紫陽花邑も同じような方向へ一緒に動くということですよ。いつも言うように、大倭教は神ながらの宗教ですから、信者なんていってもいなくても、問題じゃありません。信者を百万人、二百万人こしらえるよりも、本気で墓までも一緒に行くか、という気持ちの人が四、五人でもいた方が社会のために動けます。

だから、紫陽花邑がそういう人たちの集まってくるような場所になったら結構ですね。歴史の

俱利伽羅落くわしからおちのようなものも感じます。(※7:俱利伽羅龍王——不動明王の化身とされる龍王——が剣に巻きついた形のように、らせん状にくるくる回りがから落ちること。小学館『精選版 日本国語大辞典』より) わずか千二百年前にさかのぼるだけですが、奈良時代の頃、この付近の土地には外国から来たいろんなアジア人たちが足跡を残しました。あるいはローマ辺りからも来ていたかもしれない。そういう歴史の還元性というか、土地そのものの「氣」が私に移ることもあるのでしょうか。

とにかく、次の世界を作っていくという人たちの集まって来る場所になるような気がしますし、またこちらとしても受け入れるための場所を作らなければいけません。「むすびの家」は、そういう現れの一つではないかと思えます。ライという病気が橋渡しし、きつかけとなって、いろんな面で社会を浄化していく人たちがここに集まる。憶測ですけどね。

アジアの記念碑

鶴見 昔、ライになった日本人たちは、本当に山奥へ閉じ込められてしまった。死んだような気になって生きるよりほかに道がなかった。だから、ライを患っていない者も、一度同じような境涯に自分を置いて、どうなってもいいという気持ちでくぐり抜けた後は、生き方が不定形になる。背広を着なくてもいい、ネクタイしなくても、ズボンはいでなくても、マルクス主義者でも右翼でもなくなっていていい。良い方へ向かって生きよう、という気になる。

だから、ライはそのためのキツカケです。もう今では治る病気ですから。精神的などん底を通過して新しい人間に再生する場所として「むすびの家」

を考える。ライの経験を経るとどうか、ライが交流の接点になる。治らなかつた歴史は精神的遺産として残る。記念碑として。

ライの患者は、実際だんだん少なくなっているし、無菌の人が増えていく。けれど、昔「ライ」という刻印を押された人たちは、いったん自分は死んだものとして生きたわけですよ。その道を我々は想像力でたどる、ということですよ。

「むすびの家」をその学びの場にする。本当に良い方向へ行くなら、どんな形でもかまわない、という学習の場所です。レーニンの道からそれるとか、※8:トロツキーでなくちゃいけないとかいう話は全部ご破算にしまつてね。(※8:レーニンと行動を共にしたロシア革命の功労者。急進的な「永続革命」思想を唱えた。後にスターリンと対立、亡命先で暗殺される。なお日本では50年代頃から、スターリン体制追従の日本共産党に不満を持つ左派がトロツキー主義を肯定して次々に離反。新左翼と呼ばれる勢力を拡大する一方、この動きに対して同党は離反者を「トロツキスト」と呼び強く非難した)

誰が来たっていい。誰でも一緒にやれるようなプログラムを春、秋に編成するとか、いろいろな事をしていったら面白い。やれると思います。皆さん若いんだし。

法主 そうなれば面白いですね。

鶴見 ライは、日本からなくなるのが望ましいし、仮になくなつたとして、それでも「むすびの家」は必要でしょう。ライの無菌者の社会復帰はここから始まつた、という非常に深い意味を持つんじゃないですか。誰か主旨を起草しなさい。

法主 病気そのものは10年も経てばずいぶん減るでしょうね、恐らく。

鶴見 その時、もう患者はいないので天下泰平である。だから「むすびの家」は建てる必要がなかつた、と言ってしまうのは極めて現象的な考え方だなと思います。

零位に立つ

法主 やはりそういう考え方を一歩突き抜けるような……。

鶴見 山岸会が※9:「零位に立つ」と呼ぶ考え方も非常によく似ています。(※9:決め付けやとらわれの一切ない状態を同会は「零位」と名付ける。先入観が腹を立てる⇨対立する根本原因とみて、自分が正しいという先入観や思い込みを「棚上げ」し、他者の意見や「事実」をありのままに受け入れる態度。全会一致を目指す「研鑽会」ではこの態度が最重視される)

四、五十年前、ライになつたらほとんど零位に突き落とされちゃつたわけです。それと同じ道を通る考え方が大切なんじゃないか。そういう人でなきゃ、なかなか頼りになりません。ギリギリのところへ追い込まれた時「これは俺の給料だ、他人には渡せん」なんて言い出す人はつまらない。だけど、追い込まれていない時に限ってニコニコできる人間が多いですから。

編集部 仏教では「死ね」ってやかましく言いますね。

鶴見 形はそうです。

編集部 禅なども「死ね」って言います。今日死んだら、後の人生は全部余計だ。その心境に立てば何でもできる。しかしそれは、ああそうですかという程度の観念的な言い方ですよ。戦争へ行つて死にそうな目に遭つたとか、実感を伴っていない。今「死ね」と言われても、身に迫る危機を感じません。せいぜい交通事故くらいですか。だから、実際はピンとこないんです。

法主 わざわざそんな状況を作り出さなくても、

外からやって来る場合がありますけどね。この例で言うと、昭和24年夏の火災。一つの建物に、子供だけで二十数人、全部で何十人も人間が生かしていました。それが一物余さず焼けてしまっただんです。

仏教で※10 無一物中無尽蔵むいちつちゅうじゆんざうと言いますが、よくこれだけ無一物になったものだ、その時笑い出した心境になりました。(※10:本来無一物——本来空であるから一物として執着すべきものはなく、一切のものから自由自在になった心境——に徹したところに、逆に一切が無限に現れ出る自在の境地が開ける、という意味。岩波書店『広辞苑』・東京書籍『広説佛教語大辞典』より)

だけど、いろんな国から、日本中から、何色にも染まっていない、何にもとらわれのない人たちが集まって話し合うのはいいでしょうね。社会的な力を持つようになれば、なお結構だと思います。鶴見 実際、共産党にも反共にもそういう人はいて、私は非常に興味を持っています。一緒に仕事もしました。だいたいの仕事もそういう人たちが数名いないとできっこないんですよ。皆、基本的にヒモ付きじゃない仕事ばかりやっています。

日本には1億人いて、世界中には33億人(対談当時)もいますから、その中からとらわれのない心の人たちが集まって、お互いの意見を出し合いながら考えを変えてゆく。そんな場所にしたいと思います。

編集部 今日は大変長い間、ありがとうございました。

※本紙では『大倭新聞』発行当時の慣習を提示する意義を鑑み、話者の発言は「ライ」のまま掲載しましたが、現在、「ハンセン病」と言い表すのを一般的としています。(編集部)

幻視

21号 『大倭新聞』コラムの再録

▼渦は天体の星雲、台風、鳴門の渦などによく見られる。外の動きが激しいほど中心の軸の空なる様子が目に映える。

明治の文明開化は、西洋と日本の何を要にして取り入れていったのだろうか。西洋とは実に渦の外の動きであり、手で触れてみることでできるものとして日本に入ってきた。

▼渦は中心がなくてはならない。というより外と内が同時にあるべきものである。ところが明治以後の日本人にはこの中心となる、手に触れることのできない部分への関心が薄れてしまった傾向がある。

物質文明に対する絶対的なまでの傾斜はどこから出てきたのか。裏返せば、戦時下のあの見事なまでの精神主義に行き着くのではないだろうか。

明治以後の日本の動きは、物質主義と精神主義の不調和な回転の歴史ではなかっただろうか。否、人類はいまだこれだけの物質と精神とを調和した動きとして使いこなしたことはないのかも知れないが……。太平洋戦争では、精神主義は神風を願い、物質主義のシンボルとして原爆は投下された。

▼確かに物質への傾斜は、戦後の日本の復興に最も力を与えたものであったかも知れない。

では、精神主義は物質主義に負けてしまったのだろうか。精神主義などというものは、負けてもらってもいいけれど、物質そのものを使いこなす得なくなった現代にはちよつと不安、不満がある。この精神主義でもなく物質主義でもない新しい文化の基盤はどこに求めていけばいいのか。

原爆を作り出した知性と原爆を落とされてもへこたれない精神力とを持ちうる人類ならば、原爆を落とさぬ心と豊かな生活を！ (ポン)

幻視

22号 『大倭新聞』コラムの再録

▼タテマエ(建前)とホンネ(本音)という言葉がある。『武士道とは死ぬことと見つけたり』これぞタテマエ文化であった。浪速商人はホンネの世界に生きる。上方漫才はエエカツコウシイを擲擻ちやくちやくして笑わせる。これもホンネ文化であろう。

▼明治以後のタテマエ文化は戦後ようやくホンネ文化に還ってゆこうとしている。けれどもタテマエの思想は我々にとつて無意味なのであろうか。タテマエとホンネの関係は、いわば理念(理想)と現実(生活)と言い換えることもできる。いまやタテマエの世界に固執する「武士」は少なくなつた。

▼メッキが剥げるといふことがある。夢と未来を託するに足るとした大東亜共栄圏も、八紘一宇も自滅した。アメリカの民主主義も、ソビエトの共産主義も、中国の共産主義も幻影であつたのか。そうだったとすれば、戦中派の人々が、タテマエを信じなくなり、ただ自分の生活にのみ足場を置いていったというのわかるような気がする。

だが一方では、それでは余りにも単純すぎる、そうであつてはならないのだという思いがある。▼多くのタテマエを信奉して行動する人は、現実との誤差を計算しない理想主義者ではないのか。理念と生活の乖離は必然である。

これは独断に過ぎるかも知れないが、理想郷というものは生活がある限り存在しない。だからこそ一歩でも理想に近づけようとする運動が起こってくるのではないか。

自分たちが誤りうるものであると認識しながら、理想と生活の乖離を少しでも縮めてゆくといい気の長さとも勇気を持ちたい。(晋平)

登美之郷だより

中村家の歴史——— 一大事の因縁

群馬県前橋市 内田 誓子

自家が霊地の上にあると誰が想像できたであろうか。私の母の生家は群馬県安中市原市の中村家である。今は、「新皇教宮」として静謐な氣に包まれた場所であるが、この霊地の上で昔から代々の暮らしがあつた。

中村家は古くからの定住者であるらしく、「学校には人の土地を踏まずに行ける」と言う程、地域で広範囲に土地を所有し、耕作して農業を営んでいた。神様に関する事柄が生活の中心にある独特な家庭であつた。

かつて敷地内には「大通龍」と呼ばれた社殿やお宮もあるなど、信仰の形態が息づいていたが、中村家には先祖が書き残したものは見事になく、先祖について伯母達や母の知る限りの記憶が頼みの綱であつた。この度、この中村家の歴史について触れてみたいと思う。

近代～現代

母から四代前の大三郎は、明治から大正期に大通龍での祭司であつたと考えられる。中村家の敷地に尋常でない事態があると氣付いた数少ない先祖で、修験道の修行により、神通力を高めて解決の道に尽力していたようだ。半面、修行行脚による家長不在の状態が、長男・三代吉との溝を深める結果となつた。

対照的に三代吉は、労働を惜しまず経済力を支えた先祖である。小規模の生糸産業工場を経営したが、世界恐慌の煽りで生糸価格が暴落して負債を抱えた。孫の文太郎に負債を残すことを、亡くなる時まで苦にしていたという。

三代吉の長男は勝三九で、勉学を好み、氣長で人の好い性格であつたが、文太郎が九歳頃に突然失踪してしまつた。文太郎は長男であり、父が不在の為に家業を手伝う必要に迫られ、優秀で向学心が高かつたが進学を断念せざるを得なかつた。

これが私の祖父・文太郎で、「中村家の盛衰は一代理置だ」と表現していたが、個人の努力とは裏腹に家運の斜陽化は容赦なく、不遇の時を甘受していた先祖達の苦悩に胸が痛む。

文太郎はキヨと結婚後、借金の抵当の土地を買い戻す為に夫婦で働いた。それでも大きな農家であり生活は割合豊かであつたので、長女・馬場美佐子伯母の時代は生活に困ることはなかつたという。耕作や養蚕の仕事で、人の出入りの多い家であつた。請われて金銭を貸すことも時折あつたが、次女・石川千鶴子伯母が中学生頃には生活も厳しさが伴う実情となつていった。私の母・桜井節子(四女)が子供の頃まで返済は続いたという。

その後、一男四女の子供達が結婚し、祖父母は十三人の孫を持つことになつた。その中で、長男である伯父・中村孝明の子供(長男)が耳に障害を持つて誕生した。中村家の跡取りであるはずの子供が背負つた状況に、ただ事ではない意味を感じ始めた。

靈能者巡り

その上、昭和六十年に祖母・キヨが脳梗塞で倒れたことが転機であつた。一命を取り留めたが、半身不随で病床に伏せた。祖母は嫁いで以来献身的に働き、根底から中村家を支えてくれた、心

優しく忍耐強い人であつた。厳しい姑の下で従順に努め、子供達を育て上げた。さらに、姑から継承した信仰の影響で長い間大変な状態を経験し、苦悩に耐えていた。

この機に中村家に降り掛かる不運の原因を探り、祖母を何とか救いたいという一念で、解決の糸口を模索することになつたのである。

馬場と石川の両伯母が、関東から岡山まで数々の靈能者の元を訪れた。二人共「とりつかれたように」必死に回つたという。この時の伯母達の思いと行動がなければ、到達できなかったと痛切に感じる。力を注いで道を拓いた二人の伯母のお蔭である。

その甲斐あつて、名古屋にある合掌会に加藤妙真氏に辿り着いた。昭和六十一年、妙真氏が中村家に来訪した時の話により、初めて中村家に係わる靈人の存在を知つた。靈人は平安時代の揚羽蝶の家紋を有し「平家一門の名を挙げよ」と望まれていることを伝えられた。妙真氏は「この要望にどう応えたらよいか」と困惑されていた。「日本中歩いたが、こういう場所は初めてです」との言葉は印象深い。

(最後のところで書くことにするが、この時、同時に中村家の先祖についても伝えられた。永らく閉ざした扉が一気に開かれ、新鮮な風に初めて触れたような感覚を覚えた。妙真氏を通じて、中村家にまつわる因縁の輪郭が現れたのである)

武將靈の名前は明らかにされなかつたので、平将門公ではないかと推測したが、それ以上知る術はなかつた。

昭和六十二年、慰霊の思いを込め五輪塔を建立したが、妙真氏から「この五輪塔でも満足していただけるかどうか」と告げられた。事実、以前から感じられた重苦しい氣配は、依然として周囲を

取り巻いていた。「変化がないとは、やはりこれでは及ばないということか」と、一同が煩悶の日々を過ごした。

大倭、法主さんとの出会い

「物事には専門の道があるように、通る道が異なるのではないか、神道の方向を訪ねてみたらどうか」という私の母の提言で心が改まり、霊人が平将門公であると推定すれば、将門公所縁の場所を参詣しようと、昭和六十三年二月十四日に馬場、石川の両伯母が東京都千代田区大手町にある首塚を訪れた。日頃から花や線香が絶えず供えられ、小さな一角ながら存在の大きさを感ぜさせる場所である。

挨拶して塚を去ろうとした時、得田壽之・典子さんご夫妻と遭遇した。初対面ながらお二人に中村家の内情を話すことになり、大倭を紹介して頂いた。

伯母達はこの日が将門公の命日とは知らずに起きた出来事であった。寸分の狂いもない、人力が及ばない神謀りの精緻さには畏敬の思いである。同年三月六日早速に、大倭神宮へ参詣し、法主さんと初めてお会いした。

これが大倭との出会いであった。

法主さんは目を潤ませたご様子で、開口一番、「よう、あなたたちは生きておったなあ」としみじみ話されたという。「お父さん(祖父・文太郎)が土地を守っているからええんやで」(この時点では祖父は一人暮らしであった、「よう浪費もしたなあ」と、何もかもご承知のご様子に驚嘆したが、安堵の思いが胸中に広がっていったという。

その折、法主さんのお腹が鳴動していた、そうしたご様子は見たことがないと、後に中西正和前大倭会会長や青山日元さんから伝えられた。

二月十四日の将門公の命日と伝えられる日に、首塚と伝えられた場所で大倭を紹介された。この巡り合わせを、法主さんは「順逆の奇縁」と示された。

将玄坊大善神と新皇教宮

過去に法主さんが記されたことや、伯母達へ伝えられたお話によれば(※参照『とおやまと』平成25年11月号・同28年2月号)、中村家の屋敷(敷地)は、高級な武将霊(家の子郎党の靈魂も一緒にいる)が棲息する霊地である。霊人の生存していた時の心と死後の世界の心があり、この世に対する想いが残っていて、この場所が一つの拠点にもなっている。武将霊は「自分の棲息霊地を無情に荒らされたので、少し呪罰を与えたが、中村家一族の縁で大倭に救われることになり、これに勝る果報はない」と感謝されたという。

中村家とは切っても切れない深遠な因縁がある為、霊人に対し「将玄坊大善神」という名前で大倭の座を頂き、原市の地でお祀りして現在に至っている。

平将門公は平安時代中期に、関東で承平天慶の乱を勃発させた朝敵、謀反人とされているのが歴史上の通説だが、霊界では、霊力のある素晴らしい偉い人であるようだ。将門公は地域を治めて人々に安寧をもたらす立派な天皇、即ち新皇になりたかったようなのだ。

「口伝や文書がなくても、将門公についての重大なものが必ずある」と言われる法主さんによって、漸く中村家の居住地に関係する霊人について、知り得る真実に達することが出来たのである。

そして、霊人の棲息する霊地を永久に保護する責任があること、霊人達とは永遠に交流しながら暮らす必要があるという目的により、宗教法人と

しての成立が望ましいという今後の方向を指示された。この地に「新皇教宮」の名前を頂き、新たな一歩を踏み出すことになった。

大倭の教理を元にその理念に基づく人間形成を、将玄坊様を中心に霊人達の強い霊威を背景にして関東からも創起していくことそれは、将門公が抱いていた国造りの本質と重なるように思えてならない。また、華やかな印象の平安貴族社会の陰に、埋没する真の社会の姿を見るようでもある。中村家にまつわる真相と新たな道が、昭和の暮れ、平成の幕明けと共に覚醒を始めたことは感慨深い。

登美之郷

法主さんより「この地が鎮まれば関東が鎮まる」というお話もあったと聞く。将門公が原市の地で終焉を迎えられた経緯は不明だが、土地との縁があったのかもしれない印象を受けていたところ、平成十五年四月、新皇教宮の地に古代の霊人達が関係することを、杉本順一さんより次のように伝えられた。「縄文時代の後期頃の方で、中村家とは直系の血縁ではないようだが、『遠き時につながらし者、これは事実なり』と言われていた」と。

法主さんはこの地について「北への道標」と表現されていたこともあり、合点がいくように思えた。古代人と中村家の血筋を遡ると、法主さんから頂いた「登美之郷」の名前によって結ばれる。

古くは大倭から流浪の果てにこの地に定着した古代人の郷であって、この地から北を指す者の中継地点(道標)であったように思える。伯母達の子供時代、村祭りの際は必ず中村家の庭で休憩し、井戸の水を飲むという程評判の水があり、周囲の土の層から幾筋もの水が湧き出ていて、まるで水の中に浮いている土地のようだったというか

ら、古代人がこの地に導かれたのも理解できる。古代人を中村家の大先祖とさせて頂き、新皇教宮の齋庭の傍らに紫陽花の花を証としてお祀りしている。そして、将門公の終焉の地は、古くは大先祖達が、祭祀を執り行っていた場所でもあったということが、重要な意味を持つと考える。

中村家の大先祖

一方で、加藤妙真氏から中村家の先祖について、「都(京)から九州に渡り、九州の福岡辺りからこちらへ渡られた方です。調べれば、絶対に出てくるはずですよ」「先祖は神に祀られるような方です」、また「誰か五、六歳位の子供で、非常に高貴な方を守ってこの地にお連れして来られたのがあなた方の先祖です」「かぶとの中央に草冠の字が出てくる」「この地で刀を捨てて鎌を持った、その気持ちが変わりますか」という内容を伝達されて以来、十数年の間、その言葉が母と私の心から離れずにいた。雲を掴むような話だと、半ば諦めつつも探索の日々を繰り返していた。

草冠の姓で、平安時代に都と九州に関係があるという言葉を頼りに、糸を手繰る様に辿っていった。そして、京都から左遷により、九州の大宰府(福岡)に流された経緯の人は菅原道真公であるという考えに至った。

紫陽花邑に「土師部杜・野見宿禰の住居跡」の碑があるが、道真公の先祖を遡ると土師氏の祖、野見宿禰に当たる。垂仁天皇の皇后の葬儀に際し、殉死の慣例に代えて埴輪の制を提案した人物とされる。以降、土師氏の姓を与えられ、代々天皇の葬儀を司ったと伝わる。

法主さんにも、伯母が中村家の元の先祖について伺った折、「あの時代の神官やから、誰でもなれるわけではない」とお聞きしていたが、「あの

時代」に見当が付かず気に掛かっていた。

*

平成十四年九月に馬場、石川両伯母と母、私の四名で大倭を訪れ、土師部の碑の前で挨拶をした時であった。碑がある前方から、一直線に投げられた気の塊の強い力を心窩(みぞおち)に受けた。母と同じ体験であった。

そして、「野見宿禰の五代前の神官、名はサワラギノヤヒト」と母の口を通して聞かれた。「よくぞ、よくぞ、よくぞ参られた」と、絞り出すような声と共に熱い想いが伝わり、全員が感涙で胸が一杯になった。切望していた古い先祖と巡り合えた奇跡には、深く感謝である。

事の展開を杉本さんにお話しすると「先祖返りをされたな」と言われ、「サワラギノヤヒトさんが、『我、子孫を忘れること一時もなし』子孫に我を示すことができた」と大変喜んでいること、ヤヒトさんの郷は大宰府茨木市の佐和良義神社境内である」ことを教えて頂いた。

絶えずに思いを寄せていたことが、先祖に結び付く契機になると身をもって知った。常に心を注いでくれている先祖にも感謝である。

*

道真公には大勢の子供がいるが、中でも三男の菅原景行公は、父の安否を尋ねて大宰府を訪れた折、「我死なば、遺骨を背負うて諸国を遍歴せよ。自ら重うして動かざるあらば、地の勝景我意を得たるを知り、即ち墓を築くべし」と父の遺言を受け、遺骨を奉持していた。諸国を巡り、常陸の介として常陸に赴任した際、延長四年(九二六)筑

波山の北側(現在の茨城県桜川市真壁町羽鳥周辺)に一日塚を築き、この地方の豪族源護・平良兼等と共に遺骨を納めて祀ったが、延長七年(九二九)飯沼湖畔の島(大生郷天満宮の現在地)を道真公

の奥津城と定めて、改葬し、社殿にお祀りしたようである(※『大生郷天満宮』縁起より)。

また、将門公や弟は、幼年時代に景行公を学問の師として学んだ伝承もあり、将門公一族とは何らかの親交があったと考えられる。

*

茨城にある大生郷天満宮の存在を知り、景行公に所縁の大生郷を訪れる前夜(平成十五年四月十二日)のこと、母が、新皇教宮の拜殿で「明日、茨城の方へ行きます。宜しく願います」と報告した時に、感応があったようである。「名は菅原のマサミツ。景行次男。駆けつけた時すでに遅し」。そして、「農夫になったのだ、農夫になったのだ、よく覚えていてほしい」という言葉を受けた。マサミツさんは将門公に共感、敬慕し、同志としての熱い気持ちを抱いていたと感じられる心が伝わってきて、また、そうであったことが理解できるように母には感じられた。

*

中村家が原市の地で定住を始めた由縁は、先祖としての菅原マサミツさんに起因するようである。感受した言葉によると、高貴な立場の幼い子供を擁護して原市の地を訪れたが、時は既に遅く、将門公は最期を遂げられていた。他言できない事情の為に身分を変えて刀を鎌に持ち替え、将門公の墓所を守る為に農夫としてこの地で生涯を過ごしたと考えられる。時代の潮流に必死に耐えながらも、固い決意を心に秘め、命懸けで守り貫こうとした先祖の思いが切々と胸に響く。

現代において先祖や先人について知り得たことは、奇跡的な邂逅であるが、単なる奇遇ではない。これまでの歴史の中に存在した、個々の人生を経由して継承した、命の深さが支えた繋がりであったことを今、改めて知る思いである。

あじさい日誌

3月8日 東京都東村山市の国立ハンセン病資料館の木村哲也学芸員が、『大倭新聞』『すきのお』『おおやまと』から大江満雄、谷川雁、鶴見俊輔の記事の収集のために来邑されました。

3月11日 新泉社刊『やわらぎの黙示』新版が完成、大倭出版局に送られてきました。

3月15日 大倭神宮月次祭。

3月23日 大倭大本宮月次祭。

3月24日 突然自転車であて長時間、拝殿でお参りする男性が一人。何と埼玉県飯能市から来た大倭会会員、市村隆也さんでした。交流の家泊。翌25日に林修三さん予定外の来邑。旧知の市村さんと教務本庁で談話。

3月27日 午後6時から大倭会館で大倭町自治会総会。

4月5日 有志のご厚意により大倭神宮社務所の洋式トイレへの改修工事が終わりました。

4月6日 大倭神宮月次祭。夜、大倭会館で邑倭の会。

【訃報】6日朝、教務本庁の留守電に「今日、お葬式です」というお母さんのメッセージで、嶺本佳秀さん(奈良県生駒市)の帰郷が伝えられました。2月6日、久しぶりに神宮の月次祭に参加、ガンとか余命の話をしていたが元氣そうだったのに……

62歳。追悼に代え昭和53年、高校卒業前の生徒会新聞に書いた文章から抜粋します。

【…略… 私があじさい邑で生活するようになったのは女の子のことでノイローゼになり、一度ここで様子を見ようということだった。プレハブの一室で寝泊まりし、食堂でめしを食へ、学校に通う日々が始まった。友達を呼んで遊んだり、新聞配達をしたり自由に生活して、邑の人達にはわざとらしくない自然な親切を受けた。僕と同じプレハブに住むNさんは、耳が聞こえない、二級の身障者である。今は陽気で邑の人気者だが、以前の施設では暴れんぼうでもてあましたという。

紫陽花邑の創始者の矢追日聖氏は終戦後、食糧不足の時、一般社会で生活出来にくい者、前科のある人や浮浪者とかと共同生活した。…略… あじさい邑はユートピアとしてよく紹介される。しかし楽な暮らしではない。邑の人達は一種の犯しがたい自信をもって切実に生きている。そのことが私に人間の生きる社会とは、このようなものと教えてくれた。…略…

大倭安宿苑では
3月17日 大倭墓地で慰霊祭。納骨が1名おられました。
4月1日 辞令交付。新管理職では須加宮寮に吉本華副施設長、菅原園に上手卓施設長、同

園木村和了副施設長がそれぞれ就任。また新卒採用者2名。(菅原園)

3月17日 チーズフオンデュで、少し遅いホワイトデー。(須加宮寮)

3月23日 職員と利用者の皆さんで法人グラウンド清掃。(長曾根寮)

3月26・27日(デイ) 作品づくりは、チューリップの壁掛け。

3月30日(特養) ベランダでお花見の外気浴を行いました。(茂毛路園)

4月1日 創立13周年記念日で昼食は行事食でした。(八重垣園)

3月30日 周辺散歩でお花見。

表紙写真について

福井市 齋藤 正宏

昨年二月、連れ合いの里帰りで沖繩と離島を巡る旅に出た。写真は、沖繩本島をさらに南下し、台湾近くの八重山諸島のひとつ、石垣島に暮れる前高である。麓に広がる川平湾には、珊瑚由来の白砂とエメラルドグリーン

の海が織りなす風景を求め、多くの観光客が押し寄せる。息を吞むような美しさであるが、琉球が統治していた時代、八重山諸島の年貢米を首里に送る積出港だったという歴史が残る。

八重山の人々は、古より竹富島や波照間島などの小さな島々

に暮らした拠点築いてきた。これらの島々が環礁由来の乾いた島であり、密林に覆われた石垣島や西表島に潜むマリリア原虫から免れた地だったからという。

しかしこれらの島々は水が乏しく、米が作れない。年貢を収めるためには、マリリア禍による多大な犠牲を伴う入植しかなかった。

戦時下の石垣島では、日本軍による飛行場建設が敢行されていた。那覇の陥落以降、周辺島民は疎開を強制されたため、島に渡った人々の半数を越える一万六千余名が罹患し、三千六百余名の死者を出している。後に戦争マリリアと呼ばれる人災であった(連れ合いの祖母一家は宮古島で暮らしていたが、台湾が疎開先となったため、この難を逃れた)。

石垣港近くの民宿で一泊。翌日は竹富島に渡った。南の果ての島々のそこかしこに散らばっている、むき出しの歴史の破片に想いを馳せる旅であった。

旅を終えて郷里に戻ると新型コロナウイルスに対する緊急事態宣言が出された。自粛生活が続くなかで、祖父の遺品整理に着手しつつ、司馬遼太郎氏の『街道をゆく台湾紀行』を読み始めたところ、一九九六年五月二十一日の朝刊が出てきた。第

一面は台湾出身の李登輝氏の総統の就任(前日)を報じている。彼の地へと誘われているような予感を覚えた。

編集後記

▼五十数年ぶりに蘇った幻の対談、今号が最終回。時代を超えて心に響く法話とも違う味わいがあり、昭和のあの頃を懐かしく思い出した方もおられるでしょう。当方は当時0歳で、世を見聞した記憶などあるわけもなく、編集を引き受けて即座に思ったのが注記の挿入でした。例えば谷川雁。谷川氏が筆を折った時期の対談ですし、人物像の見当すらおぼつかない。仕事の合間をぬって図書館へこもり、注記作りの資料集めに精を出すこと数ヶ月。今振り返ると「何かの行だったのか?」と思えて仕方ありません。(浅井)

あんない

* 月次祭(大倭神宮) 5月6日(木) 午後2時より大倭神宮にて。

* 大倭会主催祝会 5月9日(日) 中止とします。

* 月次祭(大倭神宮) 5月15日(土) 午後2時より大倭神宮にて。

* 月次祭(大本宮) 5月23日(日) 午後2時より大倭大本宮拝殿にて。